令和６年度全国高校総体　審判員報告書

Ｃ３審 判 長　　安福康夫
構成主審　　菊地伸宏
実施主審　　藤原祐馬

１．採点上の打ち合わせ事項
（１）競技の特性について
ア　採点競技の特性について
・ルールに則って順位付けをすること
・採点結果は新体操の方向性を指し示すものであること
イ　審判のあり方について
・審判員としてのモラルを遵守すること。
・監督・選手との接触は挨拶程度とすること。
（２）説明できる採点について
来年度には大きなルール変更が予定されていることを鑑み、審判員として説明ができる採点をすること。

（３）構成打ち合わせ事項
・構成の採点は実施に影響を受ける項目を理解したうえで、実施に影響されすぎ無いように採点すること。
・演技内容の完成度が高くなければ、構成の採点として減点をしなければならない項目があることを念頭に置き、チームや選手の実力に見合った構成であるかも見極め序列付けを行う。
＜個人競技＞
・転回中の手具操作については着地の前に操作しているか見極めること。
・ロープでは、巻き付けの操作が多過ぎないか、跳びの多様性があるかを判定する。
・難度だけを追い求めるだけでなく、演技が流れ良く構成されている演技を評価する。
・投げ受けの難度の判定で、回転数の判断は回転不足なく回っているかを見極める。
・視野外の投げ受けに関する加点は、明確に体の背面であること。
・手具による受けの加点は、多少のバウンドは許容する。足で手具を押さえる場合は、膝を超えてのバウンドは加点しない。
＜団体競技＞
・実施ミスがあった場合の加点要素は、転倒や手を付くなどの大過失があった場合は採用せず、細かな乱れ程度は加点する。
・転回系の途切れに気を付けて採点すること。特に転回系から徒手系（前転や側転など）につないだ場合、転回系の着地までが転回系になるので、交差技の難度認定の際にも踏み切りがどの時点のものなのかを見極め、難度認定を行う。
・徒手要素の難度認定については、5人全員が実施されることが条件となるので、1名でも認定できない場合には難度認定も加点もしない。
・転回系においても徒手系においても 5 人が同等の能力を持って同時性を見せられる演技を高評価とする。
・転回系同時性の表現方法について、全員が同じ技を実施するもの以外での同時性の表現についても観察し評価する。
・止まって動きを揃える構成と動きの中でシンクロ性を表現する構成の難易度の違いを点数に反映させるようにする。
・交差技の難度認定について、審判員の位置によって交差しているかどうかの判定にばらつきがでるが、それぞれの審判の位置から見えたものを判定し難度認定を行うこと。

（４）実施打ち合わせ事項
・「A　技術の減点」と「B　ミスによる減点」を明確に分けること。
・団体競技での技術の減点は、チーム内の一番劣る選手に着目するのではなく、全体を通じで判断すること。
・徒手系の技術については見解が異なる部分もあるが、今大会の順位付けを行えるよ

う、各審判で自信を持って採点すること。
・今大会以前の大会及び練習等で見たことがある演技について、先入観を持たず、当日実施された演技について採点を行うこと。

２．採点上起こった事項とその処理
・演技中に伴奏音楽が細かく途切れるチームがあり、演技終了後に状況を確認した。CD板に傷がついていたことが原因と思われたが、公式練習では起こらなかったとのことであった。会場では２台のデッキが準備されており、使用したデッキの設定や精度によって傷を認識したりしなかったりする可能性があるとのことであった。採点に影響はなかったが、他の大会では音楽が止まり大きな減点になった例もあるため、準備には細心の注意を払っていただきたい。
・団体競技でのトリッキング系の技（ライズ）で、空中局面での縦回転が見受けられる選手がおり、転回系の過不足の減点を行うことになったチームがあった。映像確認もしたが、審判員の位置によって見え方に差が出ることから、一律で減点処理をせず、各審判員の判断とした。
・演技のスタートにおける接触で、スタートの接触のあと、いったん全員が離れ、その後もう一度、組運動につなげたチームがあったため、転回系扱いとなり減点処理を行った。
・構成での加点を狙うあまり大きなミスへつながったり不自然な運動になったりし、実施の減点が大きくなる選手が多かった。
・ロープは投げ受けや操作中の緩みで減点がされやすく、できる選手とできない選手で差が大きく開いた。
・基本徒手（体回旋・斜前屈など）でのふらつきが多く、上位層でも見受けられた。

３．その他特記事項・意見・感想等
個人競技については、ジュニアから競技を継続して、大学生に匹敵するような演技をしている上位選手が増え、高校生のレベルの高さを感じた。ただ、難度を入れるために演技の流れが途切れてしまう場面が見受けられ、徒手の動きと手具操作、難度をバランスよく構成に落とし込み、美しく実施できるようにしていくことが今後の課題だと感じた。
ロープの演技では、難度をとるために似たような構成が多くみられた。特にロープの特性である跳びが少なく感じられ、空間の使用という面で平面的な演技が多くみられた。また手具の緩みが多く、その是非で実施減点に大きな差が出たことを考えると、加点や難度だけでなく、美しく動くことを大切にしていくことが今後の課題だと考える。
団体競技については、５人の能力差があるチームをうまくまとめ、見劣りしないように構成しているチームも見られ、指導者の先生方の苦労が見て取れた。上位チームはそれぞれのチームカラーが演技に反映されており、甲乙つけがたい素晴らしい演技だった。
その一方で高度な技を目指すだけでなく、美しく丁寧な徒手体操に磨きをかけているチームがあったことにも着目したい。目新しい技や力強さも新体操男子の魅力ではあるが、手先や足先の細部の動きこだわり、修練を積んできたチームが見せる美しさは、順位とは別に新体操本来の良さを表現していたように感じる。
審判員も多種多様なチームや選手を、バランスよく見極められるよう、さらなる研鑽を積んで、今後も適切な序列付けを行っていきたい。
最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、高体連本部、実行委員会の皆様、役員や補助員の皆様には大変お世話になりました。きめ細かに計画され、心温まる運営をされたことに心より感謝いたします。ありがとうございました。